

作東の文化

No. 28



書道 板垣伊都子

平成14年10月15日

作東の文化

No. 28



作東町文化協会

目次

巻頭言

自然現象……………圓東順一……………1

特別寄稿

書というもの……………阿部雲魚……………3

乳色の風景……………岡田千茶……………4

最期の牛よ！……………井口克己……………5

雑感……………春名宏……………7

所感寸言

時計……………衣笠隼巳……………10

二十世紀を振り返って……………山下堅……………11

随筆随想

追憶……………青山元江……………15

正名学……………江見和巳……………15

思うまゝに……………加藤美雪……………17

つばめの子育て……………井口祥子……………18

老いのたわ言……………吉政實夫……………19

江見商の教壇に立って……………原洋一……………21

歴史紀行

甦った粟井尋常高等小学校校歌……………原利保……………24

短文芸

ルソン島の戦記より抜粋……………坂部金治……………25

江見の街残らず焼亡……………安東靖雄……………28

詩

むさしの里 竹山城……………田中清一……………31

俳句

一軒家……………黒薮貴……………32

雨水……………長家克子……………32

力餅……………春名静山……………33

初詣……………青山元江……………33

姫女苑……………高橋やえ子……………33

こどもたち……………春名波留夫……………33

春惜しむ……………遠藤綾女……………34

栗の花……………井口祥子……………34

雪柳……………安東和子……………34

猪鍋……………山本登山……………35

一年をふり返る……………山下照夫……………35

残照の芒……………森本久子……………35

大罌粟……………江見和巳……………35

歓喜……………宿野淑子……………36

初句会……………加藤美雪……………36

くちなし……………杉本幸子……………36

表紙説明

題 「カサブランカ」 日本画

今年も美しい大輪のカサブ

ランカが咲きました。

優雅に花と花が舞っている

ようで、私の好きな花です。

井上 美智江

黙 禱	春 名 貞 女	36
点 滴	坂 部 金 治	37
桃源郷	山 本 緑	37
川 柳		
旅	山 本 昌 子	38
非礼な電話	江 見 和 巳	38
すずめの根性	遠 藤 綾 女	39
借老同穴	小 林 亨	39
四コマまんが	よ だ な へ	39
黄 砂	山 本 登 山	40
大判小判	黒 薮 貴	40
時事いろいろ	山 下 照 夫	41
夢	山 本 千 恵	41
ひとり言	山 下 光 子	42
世のうつり変り	春 名 房 代	42
大晦日	森 本 久 子	43
暑 さ	山 平 順 三	43
楽 園	原 洋 一	43
葱坊主	春 名 静 山	43
短 歌		
日は巡る	大 内 薫	44
母に似てゐむ	三 木 泰 葉	45

ぶり市	加 藤 幸 子	45
懐かしき人	原 洋 一	46
したたかに寝て	安 室 舜 海	47
日は好日	阿 部 す み 糸	47
生かされて	鈴 木 正 志	48
生きむとせむか	小 林 増 代	48
金 婚	春 名 静 山	49
ドナーの役目	黒 石 登 代	49
「古代吉備王国」管見	加 藤 芳 英	50
四ツ塚	江 見 和 巳	51
櫟若葉の下に	中 川 富 美 枝	51
阿部仲麻呂	黒 薮 貴	52
竹群のめぐり	黒 石 貞 子	52
町の昨今	山 下 照 夫	53
夢よ醒むるな	杉 本 幸 子	53
折折に	新 免 初 子	54
わが庭は花一面	森 本 久 子	55
植物の生命力	春 名 房 代	55
終戦初年兵の詩	小 林 亨	56
中国を訪ねて	加 藤 保 子	56
孫	山 下 光 子	57
鉦の里に	山 平 順 三	57

地球にやさしい生活	山 平 利 恵	58
地子育ち	岡 田 利 子	59
もう会へぬかも	北 村 和 子	59
心	鳥 形 節 子	60
蛩	宿 野 和 穂	60
春	名 部 方 子	61
わが思ひ	鈴 木 秀 子	61
閃くままに	藤 本 伸 子	62
春めきぬ	横 山 美 恵 子	63
折折の花	光 井 つ や 子	63
折折に	横 山 昌 子	64
初夏の夕暮	安 西 苑	64
庭の表情	横 山 す み 子	65
少女	名 部 和 子	65
金の貝	船 曳 彩	66
この道	長 澤 和 枝	67
柚子の実	名 部 み どり	67
風	末 宗 千 歳	68
徒然なるままに	加 百 由 起 子	68
折々に	森 本 か よ 子	69
柿本人麻呂と依羅娘子	谷 名 保 美	69
悔悟の海	関 内 惇	70

専門部活動報告	71
文化協会芸能部の活動について	
支部活動報告	72
作東町文化協会会則	73
平成13年度作東町文化協会事業報告	75
平成13年度作東町文化協会決算書	76
平成14年度作東文化協会会員・役員名簿	77
あとがき	89

(小学生の版画は平成十三年度作品です)

〔巻頭言〕 自然現象

会長 圓東順 一

「伊州谷が鳴りだしたので、あすの朝は雪がくるかな」これは老人の会話である。

家の前の山の谷を伊州谷とって、別に変わった谷でもなんでもない。木枯らしの吹く底冷えのする冬の夕方、伊州谷が「ゴーゴー」と鳴りだすと、出会った人たちの会話である。

こんな会話の翌朝は必ずといっていいほど、うっすらと雪が降っている。また、夏の日の午後、観音様の上が黒く曇り、あたりが薄暗くなり、風がサーと吹きぬけ、ざわざわしだすと、みんなあわてて洗濯物を取り込んでいる。ものの五分か十分もたつと必ずといっていいほど俄雨がくる。俗にいう夕立である。

現代は気象の観測も発達し衛星からデータが送られて大気の状態が手に取るようにわかる時代になり、テレビの天気予報を見ればその日の天気はほとんど判る時代になっている。

こうした細かいデータもなく、大ざっぱな予報しか判らなかつた時代は、その土地土地の雲の流れや風の方向、夕日の沈み具合等を見て雨とか雪とかを予測していた。それは長年の年寄りの勘といい伝えて

自然の現象をとらえていた。

台風が四国の室戸岬の南を通ると広島風が吹くというのもいい伝えとして残り、土地の人たちは警戒している。

私たちのくらしはこうした自然現象によって大きく左右されている。その自然現象が命や財産を一瞬にして奪う恐ろしいこともあるが、反面くらしを豊かにもしてくれている。

私たちの祖先はこうした自然現象をくらしに生かすために、水神、風神、雷神等と神が宿っていると考えて、その土地土地で祀り事を行っている。

自然の現象には出来るだけ逆らうことなく豊かな生活が送れるようくらしの中に取り入れている。

ある時には詩に詠み、ある時には絵に描き、またカメラに収め、自分も楽しみ、人も楽しませている。

嵐の中を傘を半開きにして雨にぬれながら、小走りに走っている美人画。ゆれる柳の枝に飛びつく蛙の絵と詩。人それぞれに感じたものを感じたまま表現し、見る人に強い感動をあたえている。

生活の中で自然の現象をその人その人なりに心の鏡で写しとらえて表現した作品。

ほんとうに見る人に、読む人に強い感動をあたえるものである。

特別寄稿

書というもの

阿部 雲魚
(岡山市 書家)

書というものに掉してから七十年もの長い歳月を過ごした。今以て書が書けない。日々心閑手忙の近頃である。書を「書き方」程度に思っ居た頃はよかったが、もっと深く考を沈めてみると、書はとても困難な習い事の一つであり、これで終わりということはない。生涯学習であらう。毛筆一本で何時でも書けるが仲々真の書は出来ない。「かりそめの走り書きにもその人の心の見ゆるものと聞きては」という歌がある。美しい空間を持つ用紙に一筆入れた瞬間に心が緊まって怖ろしい感じがする。書き終わった時は安らぎ直ちに一見すれば己の心と技が露出して居る。書いた文字の形も各種各様であり、線のもつ情性は何とも複雑怪奇で観る人の力量に従って、よく分かる。怖ろしいものと楽しい心の双方が出て居るし、墨色の美しさは、幽玄感を現出して心に響く、この観る悦びは、格別であり、眼の力を持たぬと見るものの良否

が一向に分からない。所謂猫に小判となる。墨彩、筆力、結構、配置、調和等章法しょうぽうが分かる人は、楽しく観る事が出来る。何でも観賞にはその方面の観賞力が無いと駄目である。一墨で五彩の極を示し、白と相対する墨色は、東洋芸術の粹を顕わし、寔に観賞の楽境と申してよい。然し、これを観賞し得る人は、実に少ない。

書者の人間性(趣味や学問其の他)に起因するので、書を学ぶ人は大変困難な道に岐入るのである。学書は忍苦と精進が生涯続くから大抵の人は初心を貫く事が出来なくて途中で終わる人が多い。仮に学習したとしても方向が異なると良書は生まれえない。実用書ばかりに執心して、「早く、正しく、美しく」丈では韻致いんちの高い品格のある風趣の書は生まれえない。

昔の人は「書は如也、その人の如き也。」と、又中国の柳公権も「心正しければ筆正し」と述べて居る。自分

の眼を向上し、成長させ、深化した眼力で、時代の動きも知り、よく心を定めなくてはならぬ。知恵の限りをつくして、格調という權威を発掘して品格の勝れたその人独特の自在の表現に到達しなくてはならぬ。気品の高い境涯の人となるよう、心を磨き、技を治めねば良書は出来ない。僧物の書には手芸というよりも見性得悟の修業をして居る書には独特な味わいが生まれて居る。何人も芸術の効用の深さが分かってみると、書の良否が自然に観る者に響くので、一見して分別される。書を通して人

を見るのである。それ程、書というものは大切であり、貴重なものである。

書を書く事は静寂の中に端座し清浄心で素直で自然に書けばよいのである。

書はすらすらと書けばよい。

結果は紙上に有りのまま現れるので仕方がない。心ある人々、書は人として学ぶべきものの一つであらう。

(二〇〇二、五、二八記)

乳色の風景

岡田 千茶
(朝日新聞岡山柳檀選者)

季節で言えば春のような。一日で言えば朝のような。華やかな、それでいて清々しい乳色の、白っぽい取り留めのない色彩であった。

その霽に似たものが次第に晴れて、白いものが動くのが見えた。背負われている祖母の肩越しに私はそれを見ていた。白いものは狐だった。舞台の上で人に操られている作り物の狐である。

神社の森の杉や檜の樹間から漏れてくるキラキラした太陽の光の中に、太い尻尾をもった大きい白狐が、下手から上手へ、黒衣の人の手で舞台を横切って行く。

私にとつて生まれて初めて自分というものを自覚し、そして初めての記憶は、そんな風景の中であった。不思議なことに、そこには私と、私を背負っている祖母の二人だけしか居ない。当然居たはずの観客の姿はない。

当時作東地方では春秋の神社の祭礼の時など、地方回りの一座を呼んだり、村人が稽古をして素人歌舞伎を上演することが盛んだったが、私が見たのは人形芝居である。人形浄瑠璃のことを祖母は「淡路」と言った。たぶんその頃淡路島の人たちが一座を組んで、作州のこの地方にまで巡業に来ていたのであらう。

土居に春日神社がある。私の家から四キロ位の所だ。その春の祭りの催しのひとつに、人形芝居が上演されたのだ。その頃江見の町内には公会堂があって、舞台として利用するときには、建物の片側を開放して、その前の広場に筵を敷いて座席を作り、舞台へは花道をかけ、座席の回りを筵や布で囲み、観客席の上にはテントで屋根を作って芝居小屋にした。春日神社の境内に舞台があったかどうか、勿論私は記憶にないが、江見と同じような施設があり、芝居小屋として設営したのだと思う。

「春日様に淡路が来てなあ、よつちゃんに見せてやろうと思うてなあ、四つにもなる大きなもんを負うていったんじゃ。それ、ビロビロの簪をさした奇麗なお姫様が出たろうが」と祖母は私に繰り返し繰り返し話した。

その為かどうかわからないが、話を聞く度に当時の女

性としても背の低い祖母が、普通の子供より大きかった私を背負い、背負った私の足をぶらぶらさせながら歩く様子を、第三者の目で思い描くことが出来た。

私が見たのは「本朝廿四孝、狐火の段」であろうと、今にして思う。私が自分という者の存在を意識する一番初めの出来事であったから、芝居というからには小半日そこで過ごしたはずであるのに、観客も狐以外の登場人物も、鳴り物の音も、それらを含めたざわめきも、当然ながら一切空白である。

九歳の時に私は母と死に別れたが、私たち兄弟を母代わりに育ててくれた祖母は、私が兵隊で台湾に居た昭和二十年、八十三歳で亡くなった。

春日神社のこの時、私は二歳と二か月であった。

最期の牛よ！

井口克己
(東京都・詩人)

その夜狂牛病の番はついにたおれた

あがく足先にきらめくのは海のかなたに天を

つく黄金の大都市

二つの赤の血袋は最後の力をしほり胸郭を蹴

破って飛びたった

和牛の糞だらけの巨体の中から

すでに狂いきった心臓の目前に立ちふさがる

のは二本の天に消えている白い塔

憤怒にさかる青い臓腑は突撃の操縦桿を離さ

なかった

空を突きさす巨大な角柱の胸部は緑の傷口を

うがたれた

当代一の巨塔はくずれながら真紅の炎をはな

って紺碧の朝空を焼きつづけた

（二〇〇一（十三年九月十一日、深夜メモ、未発表））



書道 森本 かよ子

緑につつまれた美しい自然、小鳥たちのさえずりを聞きながら温かい陽だまりの中で、笑顔がはじけ談笑が何とも楽しげに感じられます。そんな環境や老後を思い浮かべつつ作東寮のお年寄りの皆さんの元へ足を運びました。

そこには楽しげに話し合いをされる方、庭で草むしりに汗を流して下さる方、病気がちでベッドから離れられない方、様々なお顔を見受ける事となりました。

この時は心を動かされました。今日まで作東町の、そして勝英地域の、広く言えば日本の戦後の荒廃から発展へと精一杯に働いてこられた皆さんに楽しい老後を送りしてもらえ環境整備をする事が出来たならば、いや、しなくてはならないと心に決めました。

早速、平成十一年二月作東寮の管理者会議を開催して副管理者の皆さんに、施設が老朽化して、住環境が非常に悪くなっているので、介護保険制度も始まり福祉の充実が求められる時期でもあり、是非建築を承認してほしい旨お願いを致しました。論議の末この趣旨を理解いただき建築に向けて第一歩を歩みだす事が出来ました。

で合意する事と致しました。合意された原案を元に平成十二年十二月町長会、議長会の合同会議を開き、作東寮改築に伴う負担金割合が決定する事となりました。

こうした経過を踏まえながらも平成十三年一月に再び負担割合について異議の申し入れ書の提出を受けるに至りました。再度協議する事となり協議を進めましたが既に決定事項であり再度の申し入れには応じられないという事となりました。

紆余曲折は有りましたが平成十三年六月建築設計業者が決定となり、愈々建築に向け本格的にスタートが切られました。設計内容の協議を再三行った後、十月に工事施工業者が決定し、年末を迎えた十二月に工事安全祈願祭が執り行われ、建築の槌音が響く事となりました。

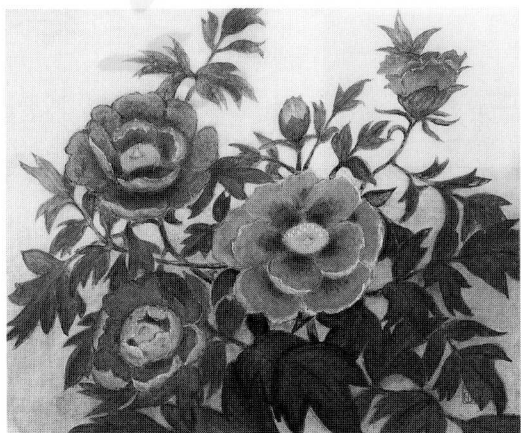
その後施工業者の精力的な施工と努力によって、寒風をついて工事が順調に進み、平成十四年の春には躯体が完成するまでに至りました。五月には内装関係工事が始まる等一日と施設としての姿が整っていきました。お年寄りの皆さんが仮設施設で不自由なさっており、何か一日も早くとの願いが施工者にも伝わり、天候不順をも物ともせず、もくもくと工事は進み八月中旬には養棟が完成する運びとなりました。備品類が整備されると早速に引っ越しをして、一日も早く安心して暮らしていただきたいと思えます。

この後議会へ施設の老朽度を調査するための予算を計上して、建築を目的とした事前調査をする事となりました。老朽度をチェックして、施設の損傷が進んでいる事が認められたため国に対して「施設整備計画書」を平成十二年五月に提出する事になりました。国・県では提出された計画書の審査が順調に進み、平成十三年度で建築がほぼ承認される見通しとなった平成十二年十月「M町」から建築施工について決定合意がされていないし、建築をするとしても建築費の町村毎の負担割合について従前の取り決めによる割合では承認できない、建築するとした場合には建設費用は施設の利用人口割合で負担すべきであるとの申し入れ書が本町へ送付されてきました。本町ではそれぞれの項目は機関決定がなされている旨を伝えますが理解が得られませんでした。急遽関係団体で会議を開き協議を重ねる事となりました。

再三の協議でも「M町」は主張を繰り返すばかりで合意に達する事は出来ず、振興局に、たまりかねて仲介調停に入ってもらう事となりました。この結果本町やその他町村では申し入れに対して譲歩する形で解決を図る事

眼下に吉野川の清流や田園風景が望める小高い丘の上の施設は、余生を楽しんでくつろいでいただける施設としての姿が整いつつあります。深く刻まれたしわのお顔からほとばしり出る笑いや語らいが、豊かな自然の中で愉しげな情景となる事を祈る今日この頃であります。

平成十四年七月吉日



日本画 鶴石早苗

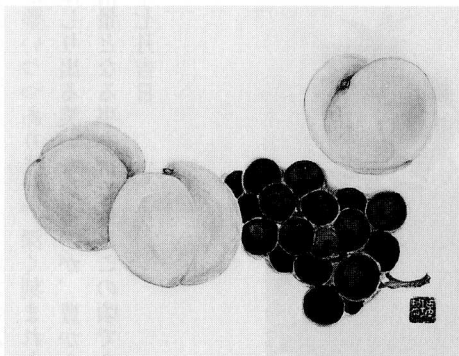
祈感寸言

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



日本画 小林 理智子

時計

衣笠隼巳

人から見ればそれ程値打ちがあるとは思えない物でも本人にとっては大切なものもある。

私で使用しているこの時計、一万円も払えば二個でも買える安物である。なのに私にとっては大切な品である。

あれは昨年の四月頃、友達と山へ芝刈り（ゴルフ）に行った。プレイの途中管理作業をしていたユニボが作業を中止して私達を通過させてくれた。三ホール程行った時、先程のユニボの運転手が大声で私達を呼んでいる。クラブでも置き忘れたのかと引き返して見ると、「これ貴男方

が落としましたと違いますか。もうすこしで轆くところだったよ。」と言って時計を出された。見るとそれは私の時計だ。しかも、言われる迄全く気がつかなかったのである。お札を言っ受取りながら、この時計は運のいいやつだ。轆かれなくてよかったと思った。

それから半年程後、植木の枝打ちと雑木切りを兼ねて山仕事に行つた。夕方になり家へ帰ってみるとはめていた時計がない。翌朝早速捜しに行った。探すといつても足もとの悪い山の中、しかも広範囲である。およそ半日、作業したと思われる順

に捜したがとうとう見つからなかった。あのユニボに轆かれる前に見つかり運のいいやつだったのにと、思うと残念な気がしたがしかたないと諦めた。

家へ帰り妻に話すと、「どこで落としましたん。」と聞く。「そこがわかっとならば一番にそこを捜さあや。」と私は言った。すると妻がその山へ捜しに行くと言いだした。昼食後一緒に山へ行き行動した範囲を説明したが、落とされた本人が半日も捜して見つからないものが見つかる筈がない。まして妻にとっては初めて行く山であり無駄な事だと私は思った。かれこれ一時間程した時、「もし見つかったら何を奢ってくれる。」と言った。へんなことを言うなと思いつつながら、「見つかるわけがないが。」と私は言った。すると「ほら。」と

言って見せたのは紛れもない私が落とした時計だった。バンドが切れていた。それにしてもよく捜したものだ。妻の干支は戌ではなかったはずなのに……と思いつながら私は嬉しかった。そして安物とはいえ、こうして二度も私の許に帰ってきた時計が

愛しくさえ感じられた。

近頃は物が氾濫し、少し修理すれば使えるものでも捨てる。ただ型が古いというだけで捨てる。そんなご時世であるが敢えてこの時計毀れるまで私は持ち続けたいと思う。

二十世紀を振り返って

山下 堅

二十一世紀を迎えた今日、過去百年間の歴史を振り返ってみると、明治、大正、昭和、平成と世代は流れ、

その間文化文明の発展により我々を取り巻く社会はすばらしい変化と発展を遂げて来た。過去の百年間、つまり二十世紀の歴史の流れは、それ以前の数百年、否、千年かそれ以上

の歴史の流れに匹敵する社会の変化と発展が起こったと言っても過言ではないと思われる。

そこで二十一世紀の幕開けという節目の年に二十世紀を振り返りながら、身の回りの生活を中心に激動の世紀と言われた社会を振り返って見たい。紙面の都合により本誌では主

として農業と農村の暮らしについて第二次世界大戦を境として戦前と戦後に分けて見ることにする。

戦前までの農村社会は地主と小作という社会の仕組みの中で農家の暮らしが営まれており、資産家としての地主がその地域の大部分の田畑を所有し、農家の大部分は地主からその一部を借りて耕作し、借用料として何某の収穫物（米）を上納していた。地主は年貢としてその中から藩へ上納するという制度がずっと古く江戸時代以前から続いていた。この制度は戦後の農地改革によりなくなった。

ところで、稲作の方法についてもその変化は著しく、農機具の機械化、近代化によって労力も軽減され、能率化されるようになった。一昔前までは田を耕すには牛を労力に使って

いたので農家ではどの家も牛を飼っていた。田を耕すには「牛鋤」という道具を牛に引かせて鋤いていた。牛を農耕に馴れるまで訓練するのも大変だったろうし、その牛を自由に使いこなすのも難しかったと思う。

今では牛馬を使った農耕作業は姿を消し、耕運機そしてトラクターへと機械化したので一般の農村では牛を見かけることもなくなっている。今でこそ土地改良で圃場は整備されているが、一昔前までは田の大きさや形状も大小様々で、いわゆる棚田形式の場所も多かったのである。

田植え仕事の手順としては、「株切り」から始まって「荒起こし」「荒めぎ」等の作業、そして水が入ると「畦塗り」次に「代掻き」これらは全て牛を使っていたの仕事と手作業

でするのである。

苗は苗代で育てたのを小さい束にして田の中へ配り、田植え綱を目安に家族総出で一株一株手作業で植えるのだから一反歩の田で五人位の人数で植えて約半日位は要したものである。今では田植機の時代だから一台の機械で一時間程度で植えられようになった。

田植え終了後の仕事にしても昔は手作業での草取り、そして手押し式の除草機の使用とか今から思えばとても大変だった。今では除草機を使ったり、病虫害に対しても農薬を使うので何かと労力は省ける。

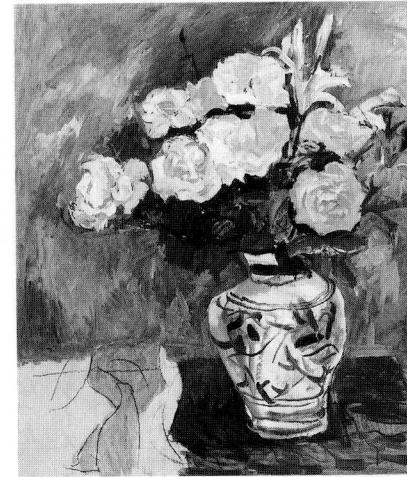
稲刈りの方法にしても昔は鎌を使って一株ずつ刈り取って束ねたものをはぜ干しにし、足踏み式の脱穀機で脱穀した後むしろでの天日乾燥、次に籾摺り、俵に入れて終了する。

それが今では刈り取りにしてもバインダー、脱穀機利用の時代を通り過ぎて今では殆どがコンバインを使った収穫の時代になった。

籾摺りにしてもライスセンター、更にカントリーエレベーターへと転換し、今日刈り取られた稲は二日後には立派な米となっているというスピード農業となった。そして、米俵にして運ばれたり、貯蔵されたのは昔話になってしまった。更に水車小屋で「コットン、コットン」と米搗きをする風景も今では見ることが出来ない。

以上簡単なながら農業の移り変わりを眺めてみたが、これだけ見れば農業は近代化されて良いことづくめで結構なことであるが、反面喜んでばかりいられない現実が山積している。

その第一は国際化の波により安価な外国からの農産物が大量に輸入されたこと、更に米余り現象の対策としての減反政策、そして農山村の過疎高齢化現象による後継者不足から現に折角高額の資金を投入して改良した田畑も次第に荒廃しつつある現実、また最近では猪、鹿その他の野生動物による農作物の被害に ついての対策等々、農業を取り巻く課題は多い。今こそ国家百年の計を立てて日本の将来を展望し、農林業の未来に明るい希望が持てるよう真剣に取り組むべきではなからうか。



洋画 青山 巖

随筆 随想

おりにふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



洋画 末宗 一之

追憶

青山元江

蒸し暑く眠れぬ夜、ふっと幼い頃の事が頭の中を走馬燈のように廻り始める。七十年の昔に戻り祖父母、父母とかけ巡る。

印象に残っているのは確か小学校二、三年の頃、胡麻の葉を祖母がむしっていた横で手伝いをしていたら語りのような歌を覚えてくれた。内容は「向こうの道を猿が三匹通りよって一番前の子猿がなまずを一匹へさえて……。」以下は忘れてしまつて、多分三番までは覚えてくれたであろうと。

当時は丸暗記していたであろう。ある日先生が「みんなの前で何か話

をするように。」と言われ、当時の事、親に言うでもなく練習するでもなく全校生徒の前でしどろもどろに発表すると、後で姉が一言「はずかしかったで。」と。今にして思えば赤面の至りです。そんな話を振り返って思う時、三猿の教えの一こまじやなかつたのか、無学な祖母が何気なく教えてくれた言葉が「見ざる、

言わざる、聞かざる」の教訓であつたと思われませう。

果たして自分を振り返って見る時、子や孫に心に残る何を教えて来たであろうか。反省するに余りあり……。何かにつけて教えてくれた祖父母、義父、母、両親、時にはきびしさもあり、涙もしましたが、其の教えを実行に移す事は出来ませんでした。何十年か経つた今でも脳裡に焼きついていきます。もつともつと聞いておけば良かった、見ておけば良かったと思ひ、及ばずながら感謝の日々を過ごしております。

正名学

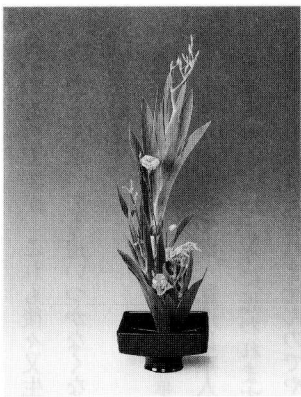
江見和巳

かれこれ四十年位も前の頃、奈義

町で建国祭が行われ、続いて東京の

某大学の教授の講演があつた。今でも忘れられないのは波動という言葉である。池面に投じた一石の波紋、打ち叩く太鼓の音の如く人生は互いに大なり小なりの影響を受け易い。其の後、当時有名だった正食の大家桜沢如一氏の陰陽根本無双原理を教わる。これは何事でも陰極まれば陽生じ、陽極まれば陰生ず、陰陽の調和を大切に考うべきとの事だった。其の後、仏教学に基づく姓名学の著書を得た。だが一番大切に思うのは其の後得た今では没後の門人に加えて戴いて居る神人友清磐山師の名霊通なのである。日々夜々八十一の数霊による運氣の作用を受けざるを得ず物あらば必ず名あり数あり。お互いには姓があり、その姓は結婚、養子縁組等の外変更は殆ど出来得ない。名も一度命名されたら変わらないとす

ると運命が不幸不運に遭わず本来の人間使命が全う出来るように配慮して命名してやるべきだと思ふ。名前には立派でも姓の数との調和のよい人、初めの人生は順調なような人も五十歳前で挫折する人も多く見られる。千差万別ではあるけれども平素から神仏を敬う気持ちを持つ事が大切である。とりわけ各地に奉斎されている産土神（氏神様）は氏子が知ると知らざるに拘わらず公私多大のみ恵みを戴いているわけだからふだんから敬虔の念を忘れてはならない。少年から成長して暴走族まがいの車の運転をして他人を傷つけ或いは殺し、自らも不帰の人となるケースを思うとき、軽佻浮薄の日頃の生活が思いやられる。画数が二十一画になる人などは頭領数或いは棟梁数などと言ひ、自ら人の頭に立ち人を



浦保田池花生

思うまゝに

加藤 美雪

今の私の思うまゝの事を記してみました。私達の若い頃、或る講演で聴いたり、又本などで読んだりして知りました事は、西洋人は服は大柄の模様や派手な色等着て年を重ねるに従い若さを失わないようにしていると知りました。

本当にそうだと日本人も思いました。以前は着物は縦縞か盲縞の紺系統の、本当に今から思っても地味な物ばかりでしたが、若い人は少々地味な物でもよいが、高齢者になれば長命するとはいえ、若々しい色柄を身につけるようになり、若さがあふれるような気分になるでしょう。昔の老人はどう

してあんなに年寄り染みていたのだろうかと思われませんが、今ようよう私に分かってきたのが、自分ももう八十一歳にもなったのかと思ひ吃驚しています。成程表面は若いように見えるが骨格等が年を取っているにあわせて骨粗鬆症に女性は特になつているので、それに併せて筋肉も柔軟性もないし、血管等もサラサラと血液が流れないので体が思うように動かす事が出来ないのでもよろし杖等に頼らなければならぬので、すべて出来なくなつて自分の体を庇うようになってしまい、眼の方も字がはっきり読み取れぬようになってしまい本を読んだり、テレビも

根よく見る事も出来ないし、草取りくらしいものですが、これも後々又生えて、たえず取っても追いつかなくなつてしまいます。

食事も西洋料理、支那料理（中華料理）と色々ありますが、私達日本人には日本料理がよいように思われます。調味料等もおぼえ切れませんのでやはり日本料理が一番手取り早いと思います。昔の人が「人生五十年」とはよく言つて居ると思います。（五十歳で終わりという事ではなく）何をするにも五十歳までであれば身体の方は心配せずに出来ますし又疲れてもすぐに元に戻り毎日が張り合ひのある日が送れます。

長寿長寿と言つて長生き出来ますのは有り難い事ですがいつの間にか自分の体をかばうようになり八十歳を過ぎればどうして生きていこうかと思われ

てきます。頭脳の方も五十歳頃までが明晰ではつきりとして希望も多い事ほどの職業も年を取ればやはり経験した事はよくわかりますので話は出来ませが身をもつて人にかわつてする事が出来なくなつてきます。

しかし、社会は福祉事業がよく整つ

て居りますので困ります事はないのですが、自分が困つてしまうのではないかと思われますが頑張つて最後までやらなければと思われませうような年齢となりました。兎も角自分の体にそうよに動けばよいと思ひます。

我が命いつまで続く夏傘寿かきじゆ

つばめの子育て

井口 祥子

四月の終わり頃、いつも巣作りする車庫につばめがやって来た。

「今年もここに巣を作り子どもを育てましようね。」

「そうだね。ここは蛇も来ないし安心して育てることができるからね。」とか何を話し合っているのか分からないが、二羽のつばめのおしゃべり

は早口でやかましい位続く。そして、車庫の蛍光灯のかさの上に巣作りを始めた。二羽は、協力して一生懸命

土をくわえて来ては巣作りを進めて行く。車庫に車を入れている夜のうちに、ベタツと糞を付けられているのには閉口するが、休みなくせっせと巣作りをしている姿を見ている

と、楽しくなり、

「がんばれよ、早く子つばめを生めよ。」

と声をかけてやりたくなる。

母つばめが、じつと巣の中で卵を温める期間もかなり長く、大変だなと思う。

五月十三日に、かすかながら「チツチツチツ」と声がする。あつ、子つばめが生まれたんだ。この事は、家族みんなの喜びである。

下からみんなで見上げる。巣の中で灰色の毛がうごめくが何羽かえつたのか分からない。

そして、数日後四つの頭がかわいくこちらに向かつて並んだ。白っぽいくちばしを並べて親鳥が餌を運んでくれるのを待っている。

親つばめは、休む間も無く子つばめ達のためにひたすら餌を運ぶ。四

羽とも

「私の番よ。ちょうだいよう。」
とやかましく一斉に鳴き声を張り上げ、口を大きく開ける。何とかかわい子つばめだろう。

子つばめは、小さい頃は糞を巢の中にするため親つばめは、白っぽい糞を口にくわえて捨てに行く。口にくわえるのだから、きつといやだろうけれど、常に清潔に気を付けてやる親心の一つだろうか。少し大きくなってくると、子つばめは、自分でお尻をくるりっと巢の外に向けてポトンと上手に落とすから四羽も巢の中にひしめいていても清潔そのものだ。それにしても親つばめは一日に何回餌を運ぶのだろうか。朝早くから日が暮れるまで相当な数の虫を捕って来ることだろう。

ある夕立のひどい日、親つばめは、

泰親は天皇の許しを得て、征伐にたちあがった。下野（栃木県）の国まで追いかけて、討ち取ったと歴史に書いている。

土居の妹尾家脇本陣（現在の高級ホテル）秋の夕暮れ、公家の姫君が下男下女を従えて、一夜の宿をと訪れた。

宿では公家の姫とあつては、そのうのないようにして、田舎ながら、山海の珍味をそろえてもてなしていた。

そこへ黒染めの法師が「一夜の宿を。」と訪れた。番頭はつよく断つたが、誰あろうその法師は「玄能法師」であった。

阿部の泰親に討たれたはずのキツネ、それが都にもどって、再びあばれ、また見破られて、公家の姫に化けて旅に出ているのである。玄能法師

はげしい雨に打たれながら巢の近くに止まりじつと子つばめを見守ってやっていた。猫などが巢の下に来ると、「チツチツチツ。」と、けたたましい鳴き声を張り上げる。常に子つばめに細やかな心くばりをしてやっている。

五月の終わり頃になると、そろそろ巣立ちも近づいたらしく子つばめの頭も黒々としてきて羽をバタバタ

老いのたわ言

吉政實夫

歌舞伎の玉藻前という名を聞いたことがあると思いますが、西暦一一〇年の頃、鳥羽天皇の御代、御所の中に美女が現れた。美女は御所の中を騒がし、かき回し困っていた。

法師はそれを追っていたのである。気付いた化身の姫君、正体を現し、宿の庭先の虎石にひょいと、とび移り、火の玉となって西に向かって逃げた。法師に追われ、勝山の西付近で逃げ場を失った。キツネは石に化けていた。法師はかくし持っていた鉄のおので、打ち砕き、討ち取った

そうで、それ以後、鉄のおのを玄能と言うようになったとのこと。話は元にもどりますが、昭和三十五年頃、脇本陣の跡方が、土居農協となり、その後、現在の支所の広場となっております。広場の付近に大きな樫の木の根方にキツネ伝説の虎石があり、三トン位で焼石になっていました。誰もおそれて近づきませんでした。

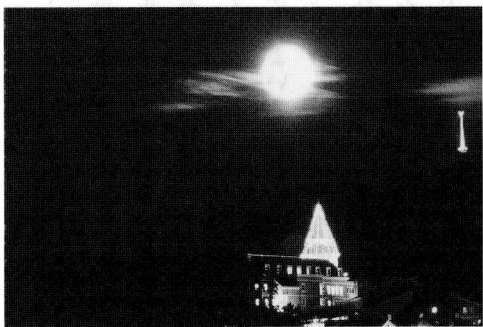
土居の神社の方へお祭りしてほしいと話がありました。当時機械が

動かすようになってきた。

そして五月三十日の早朝、ふと電線を見上げると四羽のつばめが止まっているではないか。車庫の巢を見上げると、中は空っぽ。あの賑やかな声が明日から聞こえなくなると思うと寂しくなってくる。しかし、この二か月あまり子育てにたゆみない努力を重ねた親つばめの愛に感動した日々であった。

宮中内でも文武に優れた安倍の泰親が見破った。その正体は、インド、中国で国を騒がせ、世を乱し、国を追われた白面の金毛九尾のキツネの化身であった。

なく、五個に砕いて人力で運び、現在本殿の西の石段の所に厄除神として祭っております。土居神社にお参りの節は厄除祈願をしてみてください。



和正元末写真

江見商の教壇に立つて

原 洋 一

昨年の春、教育委員会から一通のFAXが届いた。江見商業高等学校からの依頼で町のサークル活動の紹介を兼ねた国語の授業を担当して欲しいとのことであった。私がたまたま川柳同好会の幹事をしていただけで話があったのだが、さて引き受けていいものかどうか迷ってしまっ

た。私がこの町に来て三年、目にした文化協会川柳同好会の会員募集に応募して新しい生活の一部に取り入れて二年、まだまだ右も左も知らずにこの町での暮らしに奔走していた時である。少しばかり川柳をかじった

私なんかでいいのだろうか？ 今の若い生徒に川柳？ 興味があるのだろうか？ 話を聞いてもらえるのだろうか？ 不安ばかりが先に立った。しかし、若い人たちに触れられる機会には大いに魅力を感じた。世間では十七・八歳といえど何かと話題になっている年齢。興味半分怖さ半分であったが、思い切って引き受けた。半年の準備期間中、自分なりに川柳の勉強もし、授業の構想も練ってみたが、なにせ未知の世界、初めて経験、不安は拭えなかった。そして秋、いよいよ本番の授業となった。

柳を披露した。具体的な話は彼らの

耳をこちらに向けさせることができたかもしれない。多少の手ごたえを感じながら、三年生二クラスと二年生一クラスに二時間ずつ、合計六時間の授業を終えた。やり遂げてほっとした安堵感があったが、まだ不安が残っていた。彼らに何か通じたものがあつたのだろうか？ 何かを感じてもらえたのだろうか？

後日、生徒から私の授業に関する感想文が送られてきた。読んでいくうちに体が震えた。それぞれに一生懸命書いている様子がうかがえた。中には印象深く衝撃的な授業だったことへの驚きが綴られていた。さらに授業中にはできなかった彼らの自作の川柳まで書き添えてあつた。

「会いたいと電話かけても言えぬまま」

「迷路道今の私は行き止まり」

「土曜日の最後の授業うわのそら」

……

上手下手ではなく、純粹で素朴な気持ちが出ている。若い感性が噴き出していた。茶髪やピアスなどの見かけにはない彼らの一面を垣間見た気がして感動した。個性があふれていた。一人一人の感想文にコメントを書き添えて返却した。うれしかった。ありがとう！ すばらしい体験をさせてもらって感謝したのは私の方であった。生徒たちが書いてくれた感想文のコピーを私は宝物の一つとして、今も大切に保管している。

まず自己紹介、私になぜこの町にやって来て田舎暮らしをしているのか、これまでの会社生活、競争社会で思ったことなどを話した。学校の先生からはあまり聞けない話だったのか、初めは興味ありそうな様子？ でもほとんど寝ている子もいた。そしていよいよ本題の川柳の話に入った。しかし、案の定、生徒の興味は今ひとつであった。虫食い川柳をやったり、クイズ形式で進めたりという工夫もどれほどの効果があつたかは疑問だった。授業は一クラスたったの二時間だけ。このままでは生徒との触れ合いどころではない！ 急遽予定を変更、二時間目は自分の川柳作品のできる過程や心の変化を事例で話した。友人の息子さんのバイク事故の話、妻との日常の想いのすれ違いなど。そしてその時できた川

祥雲

書道 板垣 茂子

歴史紀行

大きなできごと
些細な歩み
みな
人間の歴史
かたりべとなって
伝えよう



生花 赤畑 さと甫

甦った粟井尋常高等小学校校歌

原 利 保

科の人が、校庭の片隅でハーモニカ・笛・太鼓による、校歌の演奏に合わせて、全校輪になって、踊ったことが記憶として残っております。時折開催する同窓会においても校

粟井尋常高等小学校校歌

一 双子の山を 背において
粟井の流れ さざ波の
垣根を洗う 学び舎は
我がなつかしき 母校なり

作詞 不明
作曲 不明
写譜 保田 直

二 いで幸多き 我が友よ
一つ心に ふるいたち
母校の名をば けがさじと
学びの道に いそしまん

三 開けや粟井の 清流も
このよろこびを 唄うなり
双子の山の 松風も
我等が前途を 祝うなり

粟井尋常高等小学校校歌 作詞 不明 作曲 不明 写譜 保田 直 (平成19.4.20)

前奏
一番
二番
三番
後奏

歳を重ねますと、過去のことが懐かしく思い出されます。

その一つに、粟井尋常高等小学校の校歌があります。現在は、学校の入学式・卒業式などには、必ず校歌を斉唱しますが、私が小学の頃の昭和十年前後は、ご真影の拝礼・校長の教育勅語の拝読は、必須の式次でした。校歌を斉唱した記憶はありません。

このことは、粟井尋常高等小学校が例外ではなく、恐らく、どの小学校でも同じことではなかったかと思えます。

ただ、秋の運動会に十数人の高等

歌の歌詞は、一番の初めの少しの部分のみ覚えていて、後は誰も忘却してしまっており、歌うことができません。

なんとか校歌を甦らせたいと思いい、歌詞を春名菊代さんをはじめ三人ほどの人が集まられて、記憶を辿りながら、全歌詞を思い出してまとめて下さいました。

歌詞が、このようなことですから、作詞、作曲者のことは全く不明です。

楽譜はもとよりありません。

そこで、私とその歌詞を思い出すままだに、歌ったものをテープに録音しました。

その録音テープによって、津山市山北に在住の同期の保田直氏（岡師出身・元小学校長）に写譜していただきました。

なお、伴奏もテープに録音していただきました。

が岡山駅に着く頃家族が面会に来て最後の別れを惜しんだ。生還期し難く生別の心やりであった。九月九日輸送船団は護衛艦六隻に護られ門司出港台湾に向かう。台湾よりルソン島へ、魔のバシー海峡突破、此時、

江島丸は機関の故障で鈍速と成り船団から落伍、単独航行の悲運に陥り、僚船も護衛艦も次第に浪の彼方に姿を没し、全く風前の灯火の感があった。他の僚船乾瑞丸などは初めからの上陸目的地向けて死の航行を急いだ。

江島丸は目的地を変更バドリナオ岬を利用して上陸、ローラーで昭和二十年の新春を心ばかり祝って一月四日南へ南へと行軍を始め、酷熱と疲労と食糧不足でルソン島の日記は第一項から苦難の文字が綴られる。一月四日バレテ峠へ進軍開始以来十六

ルソン島の戦記より抜粋

坂部 金治

鉄第五四六〇部隊は姫路で編成された。一方第十師団は北満国境より南方へ転出の為に門司へ極秘に集結

しつつあった。第二、第四野戦病院は門司で第十師団に合流された。

八月二十二日姫路発博多行の汽車

日間、食糧も休養も与えられず連日連夜の行軍で四三〇軒余を歩いてバレテ峠へ辿り着いた。

乾瑞丸はリングエン湾に於いて海没生存者は沖から岸へ泳いで半日掛りで上陸、太陽が水平線に落ち掛かる頃生存者一同は磯臭い渚に整列して遥沖合を拝し殉将兵の冥福を祈って敬虔な祈りを捧げた。思えば今も多くの友は辺境ルソンの浜辺に眠り続けて居るのである。

生存者は補充を受ける暇も無く翌二十四日集結してサンホセに向かつて前進を開始した。砲や携帯兵器を失った部隊、装備を持たぬ兵、油に汚れ或いは傷付いた兵が、ただ闘魂をたぎらせて前進した。リングエンに上陸した米軍は二月一日早くもサンホセ一帯に強圧を加え、守備隊との間に激戦が展開された、勇戦奮闘

遂に玉砕、鉄兵団バレテ峠の陣地構築の犠牲となった。

二月五日米軍戦車部隊がサンホセに突入して来り、撃撃戦車兵団は是を迎え討った。激烈な戦闘が数時間にわたって展開され、然し米軍は優勢な航空機を伴い装甲も火力も到底米軍の重戦車の敵では無かった。我が方は潰滅的打撃を受けた。此の死闘と奮戦によりバレテ峠に陣地構築の時間を得た。

二月八日夕刻折から降りしきる小雨の中に撃兵団の残存各隊は斬込みの手足まといとなる愛用の戦車重火器を敵の手に渡らぬように点火爆破した。満蒙の野に猛訓練を共にし遙々海山越えて今日まで生死を共にして来た戦車である。死よりもつらい別れであった。全員白鉢巻に勇み立って重囲の米軍の一角を目指して

突進しそして自らの悲惨な戦闘によって援護した鉄兵団に収容せられた。

撃兵団岩仲中将はサンホセの合戦によった苦杯をサラクサの防衛戦に於いてそそがんと悲壮な決意の下に自ら第一線に出て直接作戦指導に当たった。此の防衛戦はジャングル戦である。米軍は一步一步と執拗な浸透作戦を繰り返して来たが撃兵団將兵は言語に絶する悪戦苦闘を続けながらも、米軍の物量攻撃を反撃していた。彼我の争奪戦は惨憺たるもので、米軍は昼間航空機と砲撃によって陣地を攻略して来ると其の夜挺身白兵斬込みをして必ず是をうばい取った。漸く身体を入れる事が出来る洞窟陣地に頑張り通し木の実を食い苔を嘗め、一本の水筒を三日に分けて少量宛飲み窮しては自分の尿さえ飲んだ。当時の生存者の多くが片腕

を失い、又隻眼となっていたのは米軍が我が陣地に投げ込んだ手榴弾を素早く拾い上げて敵方へ再び投げ返そうとした瞬間手の中で破裂した為に無念の形相物凄く戦死したり又重傷を負った。サラクサの肉弾戦が敵味方共に如何に惨烈を極めたかは、此の手榴弾戦によって明らかである。物量の絶対優勢を誇る米軍が、白兵戦迄敢行して此の時を奪取せんと焦り万を越える犠牲者を出して遂に此の徒手空拳に等しい陣地を突破し得なかった。岩仲師団長の卓越した指揮と将兵の比類無き勇猛さを実証するものであった。バレテ峠を守るに当たり、各部隊に死守命令を出して居た、一兵迄闘い抜いて玉碎する事であり即ち自分の墓場である事を意味していた。然し戦争は精神力だけでは勝てない。バレテ峠の血戦

も残念ながら遂に敗れる時が刻一刻と迫って来た。戦いは五月に終わり死守命令通り護国の魂と成った戦友達の屍を捨てなければならぬ運命がきた。五月七日午後九時、突然陣地を放棄して夜陰に乗じて総転進の命令が降った。バレテ峠陥落と共にルソン島は一気に米軍の制圧する所と成り、敵は僻地の日本兵を求めて鉄鎚を下し始めた。将兵は飢えと疲労と病魔と闘い、唯気力で生きて毎日毎夜密林を進み山から谷へ谷から山へと雨の中を逃げた。情け容赦も無い米軍に大密林へ追い込まれた。冷酷無情が戦争と言う名の下で平然と当たり前の事として行われた。密林を分けて熱帯の酷熱によるめき、少しでも重荷となる物は何もかも捨て一人一人が辛うじて吾身一つを支えて居るので一度倒れた其処が即ち死



洋画 安東眞江

である。再び立ち上がろうようも無く、又立ち上がらせよう術も無い。此処彼処に落伍将兵が骸となって斃れており、唯渾身の力を振り絞った精神力が生と死の別れ道である。苦しい密林行に耐える気力を失い自決する将兵の手榴弾や小銃音が冴える。

八月十四日迄敗残飢餓の我々に徹底的に砲撃の手を緩めなかった米軍が八月十五日に至り不思議な程沈

黙した。九月七日方面軍より派遣された日本軍将校が米軍の将校を伴い第十連隊本部に到着、戦争の終結を告げ、武装解除の命令がある。戦争が終わって内地に帰れるという事は嬉しい、然しあまりにも犠牲者が多く勝って凱旋するのであれば戦友の骨も抱いて帰れよう。然し今は戦友の骨は皆捨てられてしまうのだ。草むす屍と成った戦友達に相済まない気持ちで万感交交胸に迫るのであつ

「安政の大火」と称したこと、「明治四十一年（一九〇八）二月二十九日が災後五十年に当たるを以て」郷人が集まり建碑を計画したことが書かれている。この火災は安政何年のことだろうか。「作東町の歴史」には「安政五年（一八五八）川崎村江見に大火があり」（旧版二五二頁）としている。この根拠は示されていないが、石碑の記述から逆算すると安政六年二月二十九日になり一年違う。

江見の街残らず焼亡

安東靖雄

江見地区センターの庭に大きな石碑がある。もとは、けごや坂登り口にあった。江見大火の後、街の復興に尽くした安東傳次郎定雄という人

の頌徳碑である。この人のことは後に譲り、今回は江見の大火について書いてみる。

石碑には、この火事を後世の人は

ところで、山外野村（現美作町）の黒田弥右衛門が残した日記には、安政六年二月二十九日の条に、

「今九ツ時川崎村之内江見に出火これある趣申次候に付・・・（中略）山外野から幟・水桶などを持たせ人足を派遣した記事あり」同日七ツ時、重蔵罷歸り、存外大火

にて江見市中残らず焼亡の趣・
「下略」

とある。江見の大火は安政六年であ
った。

火事の様子を詳しく述べた史料は
ない。まず、黒田日記には「今九ツ
時」に江見の火事の報告が入り、
「七ツ時」に重蔵が戻り江見残らず
焼亡を告げたとある。九ツ時は正午
と夜中の十二時、七ツ時は午後四時
頃か午前四時頃である。この火事は
昼火事であると伝承されているから
(樽井正吉さんの話)、正午前から二、
三時間も燃えたことになる。黒田日
記には「火元鍛冶屋」とあり、今の
播磨屋酒店の下側の屋敷にあたる。
焼けた範囲は旧大還橋東詰めから上
之町けごや坂口あたりまで、街道筋
は一軒残らず全焼という。当時江見
は一筋の街で、栄町筋に家はなかつ

た(樽井さんの話)。津山末沢家所

蔵の「出雲街道略絵図面」(文久二
年作成・加藤芳英さんのご教示によ
る)にも江見の一筋街の様子ははっ
きりと描かれていて樽井さんの話を
裏付ける。先の石碑には江見につい
て「草屋数十が軒を連ね」ていた
「田圃の中の江見」、また傳次郎の努
力で江見の復興に際し瓦葺にした家
は三十七軒とある。少なくとも「焼
亡」した家は三十七軒以上に及ぶの
であろう。

その他、山外野村では幟・水桶を
持ち、人足を集め派遣する措置をと
った。弥右衛門が江見へ駆けつけた
時は既に鎮火し、「村々役人」や
「駆けつけ人足」は引き取った後と
記している。当時の村にも火消しの
組織や近隣村々の間で救援の約束が
あったことがわかる。

火事の際しての見舞い品は「藁」

であった。「黒田日記」に見える山
外野村の見舞品は村民の内三十七人
分の藁二百五十二貫目、二人分「縄」
二束、六人は藁代として銀札を一人
一匁宛六匁であった。火事の見舞い
は何故「藁」なのか。山外野村では
資産家も藁を出している。このよう
に農村でも「火消し」や見舞いなど、
慣習であったにせよ、災害対策が決
まっていたように思われる。この点
の研究はまだない。このように安政
の大火のことは江見では先の「石碑」
に残るだけである。碑の下部には発
起人八人の名が残されている。

(この火事について、伝承があれば
お知らせ下さい。)

短 文 芸

生きている

あかしとしての

自分の思いを

自分の言葉で

表現する

その表現が

万人の魂を

ゆり動かす

短文芸の力

伝統文化の力

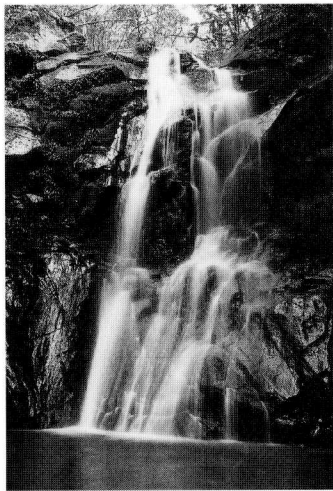


写真 青山時弘

詩

むさしの里 竹山城

田中清一

播磨も京も 修羅場みち
二天一流 燃やす刀
幾戦勝ちぬく 武蔵にも
敗れて寒し 竹山城

宮川も 人も時にし 移ろえど
永遠に鎮もる 剣聖の杜

三、戦気しずめて 舟島へ
削りし權に 割る眉間
兵法節理 論す海
勝者の悲哀 だく胸に
古里温し 竹山城

一、行者おろしか 日名倉か

滾りてやまぬ 吉野川

朝鍛夕錬 剣の道

猛けたる童 肝を抜く

目守るも優し 竹山城

四、有明望む 靈巖洞

極めし者の 書き刻む

不動明王 五輪の書

古梢に戻れる 肥の百舌鳥か

真眼鋭し 竹山城

『永遠に伝えて 竹山城』

二、宮本あとに 鎌坂や

俳句

一軒家

黒藪 貴

ぜんまいを干して山家の生活かな
モンゴルの総理の笑顔五月場所
猪よけの網よく売れて薯太る
雨もよい骨休めらし蟻見えず
里よりは遠き一軒竹の秋

雨水

長家 克子

山の木の起き出してゐる雨水かな
吉日に種子粉浸す雲白し
干し草の甘き匂ひを束ねけり
冬晴や瓦職人の身の軽し
初買ひの小さき土鍋に水を張る



洋画 妹尾美智子

力餅

春名 静山

力餅競う山寺春兆す
汗のシャツ脱いで家族の輪に並ぶ
那岐山の雪扇状に見て暮らす
猫の仔の遊び馴れたる稲架木棚
一本の桜の下の花筵

姫女苑

高橋 やえ子

ひとひらもゆかしき京の桜かな
一雨も来れば二の腕草を抜く
夏薊がき大将の泣き笑い
暮れ方は吸わるる思い姫女苑
一匹をどこまで追うやらすいっちゃん

初詣

青山 元江

嫁と娘の味それぞれにおせち重
足と腰登る幸せ初詣
遠き日や螢は蚊帳の中で飛び
黒揚羽もつれ睦みて花に舞い
虫の音も何時しか絶えて笛太鼓

こどもたち

春名 波留夫

山登る園児の肩に風花かざはなす
虹消えて一年生の教室や静か
うた声に向日葵ひまわり笑う参観日
潮騒は花火楽しむ子にやさし
心こめ渡すバトンに秋ゆれる

春惜しむ

遠藤 綾女

大山の残雪を見てバスの旅
参道に露味噌ありの店並ぶ
行春や黙々掃除若き僧
新樹晴先づ庭愛でて美術館
春惜しむ皆生の宿の昼の宴

雪柳

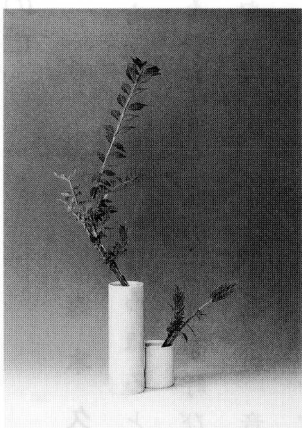
安東 和子

私たち出てふしぎな顔のふりむきし
おずおずと日ざしのとどく寒椿
芽吹き近し幹ひきしまる大銀杏
とびそうな絮たんぽぽのむずがゆし
雪柳風がほぐしてゆきにけり

栗の花

井口 祥子

一山を色変えにけり栗の花
母吟ず声の光りて木の芽ふく
夫とうて来たりし人と桜餅
春時雨平氣に遊ぶ孫二人
種蒔きて梅雨来たれりと空仰ぐ



生花 岡本 弥代甫

猪鍋

山本登山

脱ぎすてる野良着に菊の匂ひけり
猪鍋を囲む親しき友連れと
郷一軒屋根を見下ろす鯉幟
池の面の盛り上がりけり春の月
ツウリング一団青菜の風起こし

残照の芒

森本久子

花の実も優しき風にほろほると
野の花もひたすら咲いて蝶を呼び
冬枯や山里一番風の音
秋風を思はず稲田に赤とんぼ
残照の芒揺れたり夕日暮

一年をふり返る

山下照夫

初客は老婆の悲報知らせけり
マラソンの肌に優しき春の風
夏椿ぼとり落して野分逝き
今掃けど又落ちて来る落葉かな
底冷えに除夜の鐘さえ凍りつき

大罌粟

江見和巳

大罌粟が見事に咲いて夏来る
弱ひなも揃って立ちぬ燕の子
巢立ちたる燕は今宵何処に寝る
国境に果てにし戦友よ盆来る
曾孫がまた増えるらし秋の頃

歡喜

宿野淑子

降りそそぐ桜吹雪の匂ふ朝
定刻に目覚めて老いの一日はじまる
慈しむ牡丹華やぎ友迎ふ
W杯列島歡喜の大合唱
梅雨どきやりズム体操に心はずむ

くちなし

杉本幸子(土居)

夫の忌や何よりも先づ酒タバコ
みもふたもなき言の葉や寒の月
山里も駆け足の春若葉萌ゆ
暁け方の夢破られし雷雨かな
くちなしの香り流れる三日月夜

初句会

加藤美雪

初氷割り根菜を洗いけり
年一度会いて懐かし初句会
山裾の溝にふつくら猫柳
春よ来い早くこいこい老は呼ぶ
ウインドー浴衣出揃い初夏来る

黙禱

春名貞女

つゝましき幸ほしや茄子の花
ひぐらしの声のシャワーをあびており
とつ老いつおぼえて忘れ秋の草
立秋と知りてか蜻蛉群れて飛ぶ
黙禱を捧げし今日も酷暑なり

点滴

坂部 金治

山の道行手を拒む蜂の群れ
鈴成りの柿を染めたる夕茜
子の晴れ着親が付添う七五三
でつかいと思わず力む大根抜き
点滴を見上げて秋の日今日も暮れ

桃源郷

山本 緑

暑き日の川面に夕日ちぢれ落つ
紅葉狩り永劫の一日堪能す
紅葉の浮きつ沈みつ陽の入りぬ
お早ようの挨拶交わすも霧の中
まなこ閉じつかる柚子湯の桃源郷



土居小6年 高山 周子

川柳



江見小5年 前原 由季

旅

山本 昌子

温泉の香りが残る旅カバン
料理せず膳に座れる妻の旅
三日目はお茶漬ほしい旅の宿
一人では来られぬこの地ふり返り
石段を登れば御蔭ありそうで

非礼な電話

江見 和巳

最後には年齢を尋ねて電話きる
老いし事何やら安堵この世相
宿痾をばいたわりつつも年齢重ね
案外に三途の川は越えがたい
政界を清むる雨が降ればいい

すずめの根性

遠藤綾女

偕老同穴

小林亨

燕の巢乗取りすずめのど根性
畳替え当分無理です育児中
血圧の手帳バッグに通院す
母長寿頼りにされる我七十
五七五言葉のパズル惚け防止

赤い糸合縁奇縁の夫婦舟
割れ鍋に閉じ蓋夫婦ここにあり
俺がこぐお前舵とれ時化て来た
五十年長し短し走馬燈
同穴の黄泉路の宿は閻魔さめ



黄砂

山本登山

大判小判

黒薙貴

握る手の強さに心通じあい
ランドセル一年生の顔が行く
姑娘の顔が黄砂の中に浮き
ワンカップ一つで賑わうバスの旅
只一度務めた義理が落とし穴

若き日に盡したと老い恩に着せ
三人が寄れど知恵出ぬイスラエル
出演者だけが笑っているテレビ
やせ蛙励ましてやる一茶殿
八十年畠掘れども小判出ず



時事いろいろ

山下照夫

夢

山本千恵

平和とは報復丈で生れない
不況風吹いて悪事が茶飯事と
真紀子節調子乗り過ぎ頭打ち
田舎なのに誘拐までが都会並み
合併をしてもせんでも過疎となる

辻が花着る夢だけは追っている
夢さえもきょうは沈めて暦見る
小さな夢善意の窓はひらかれる
贈る夢いつぱいつめて贈りたい
東に向かい夢が現実祈ります



ひとり言

山下光子

世のうつり変り

春名房代

頃合いの言葉浮ぶはおそすぎる
タンスに寝る和着を起して変身さそ
嫌がると知りつつ口出すおせっかい
寡婦だから世のいろいろも見えてくる
案じまい転んだ先の事等は

休耕田増えて行く先案じられ
米余り増産せよの世なつかし
生きる為山の動物農あらし
廃品もきれいな袋に詰めて出し
三度飯おいしく食べて健やかに



大晦日

森本久子

大暑にも猫叱られて目をつぶり
何事も仕方なしの年の暮
大晦日出足のお銭に有難う
何話話して会話山積もり
盆踊り顔包みて姿消し

楽園

原洋一

楽園に仏と住んで風は秋
少年のポケットに夢踊ってる
君の笑顔百点満点文句なし
この背中時々泣きます怒ります
退職後妻のリズムで生きている

暑さ

山平順三

山羊産まれ蚊帳はないかと近所廻り
単線の列車がつなぐ田舎暮らし
車やめ見える世界が広がった
温暖化最高気温ぬりかえる
台風で暑さを飛ばす風がふく

葱坊主

春名静山

葬列の僧を見送る葱坊主
鉄握る手にマイク持つバスの旅
悠々自適電池の切れた計算機
凡人で何時もうしろの列にいる
草くたぶ臥れた麦藁帽子夏が逝く

短歌

日は巡る

大内薫

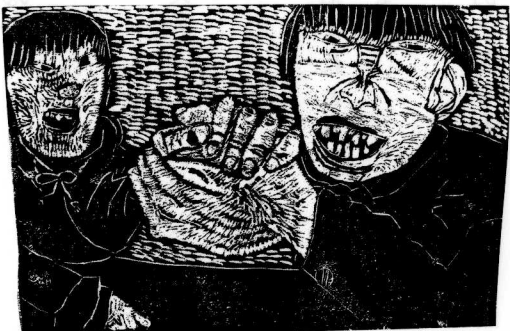
蓬の葉いぶ燻して蚊遣りとなしたるは疎開の叔
母らと暮しし昔

蓬の葉いぶ燻す煙に咳合ひてそのまま寝たる夜
もありにき

この雲の流れは雨を呼ぶらしき行列の蟻動
きがはやし

盆栽に水を撒く日をつづけつつ暑き今年の
夏もゆくらし

廃屋も捨つる気はなし妻と二人くづれゆく
まで守りて住まむ



元 友 有 5年小井粟

母に似てゐむ

三木 泰葉

一枚の硝子戸へだてて古い母と掌かさね重
ねて別る

一途にも母が泊まれと言ひ張るを別れ来た
りて畑の茄子もぐ

さびしさも父のことをもこの日ごろ語らず
母はただに老いゆく

なに思ふや母はこの手を離さざり話はす
でに交はるとなく

卵をば潰せしこともほこほこと老い行く先
は母に似てゐむ

ぶり市

加藤 幸子

山峡の町に人らの犇めきて年に一度の鰯切
り売らる

八キロの鰯を素早く切りさばく手際に人ら
立ちつくしをり

鰯さばく俄造りの仮小屋に編目の伸びたる
菰ぶらさがる

富山産長崎産と出生地あきらかな鰯が露天
に光る

珍しき水仙と指して囁けば安くするよとす
かさず買はさる

懐かしき人

原 洋一

懐かしき人に会えたる祭果て一人の家に帰
りきたりぬ

君の居たあの実感を取り戻すよく来た茶店
の隅に座って

さくさくと野菜を刻みある音が厨房よりす
る休日の朝

ミスチルもビーズもグレイもいけれどあ
なたの歌う詩が聞きたい

ビートルズ流れる部屋で雨の日は一人で居
たいあなたを想い



土居小1年 森さき たくや

したたかに寝て

安室 舜海

見舞には来なくてよしと言ひながら今日来ると聞けば待ちがてにをり

大欲も小欲もなく終りけり少し慣れたる病棟の一日

したたかに寝て過ぎむか連休に外泊なしたる友多ければ

二か月ぶりの外泊許可あり帰りきて皐月の庭の花ざかりに逢ふ

放射線の照射を受けしは三十回終りし今も夢に見るなり

日日是好日

阿部 すみえ

一年のめぐりは早し現況届に印しかと押す生れ月師走

掃き寄せし落葉焼き終へ元旦も鶏飼ひて忙し古稀過ぎてなほ

いささかのすれ違ひもあり夫と吾の共に見上ぐる欠げ月おほろ

わが欠伸夫に移りてお互ひにひと日の疲れ頷き合へり

生き来しをドラマのごとしと思ひつつ主演者われの幕閉づる日知らず

生かされて

鈴木 正志

電話では何を問ひてもただ「おう」と応へる孫よその声聞きたし

窓の辺に突如鳴き出でし雨蛙ひとしきり鳴きて後は鳴かざり

二反田に水張りて映る城山が暮れなづむなり茜にそまりて

秋日和はるかに広き峠道越え行きてみむかよき里あらむ

今日もまた生かされてゐるこの躰わが人生の大事なるひと日

生きむとせむか

小林 増代

明け方の鴉の声の明るさを救ひともしてひと日始まる

朝蜘蛛にそつと触るれば上りたり心待ちすれど誰も来らず

取れば生えまた取れば生ゆる雑草とつき合ひながら生きむとせむか

病みながら明るき歌も作られず南天の葉は風にゆれぬる

ひと日一日何はせずとも日は暮れぬあと幾許ぞこの繰り返し

金婚

春名 静山

ドナーの役目

黒石 登代

半世紀苦楽を共にせし妻と金婚式の玉串捧ぐ

腎臓を患ふ息子のドナーとなるを決めてよ
り植うトマト茄子胡瓜

エンジンの音村中に響かせて地域総出で川
原の草刈る

免疫の抑制治療を尋ねる息子の不安が吾
が身を伝ふ

代掻を終えたる夜の静けさに蛙幾千鳴き競
いおり

術前の個室は冷えし無菌室ふとよみがへる
石舞台古墳

工場となりて久しき中学の名残りの桜土手
に咲き満つ

襲ひ来る痛みは太き鬼の手か吾が腹抓りて
抓りて離さぬ

復元の西の想門甦る出雲街道土居の宿跡

観音の慈雨もかくやと浴ぶるなり癒えたる
傷に温きシャワーを

「古代吉備王国」管見

加藤 芳英

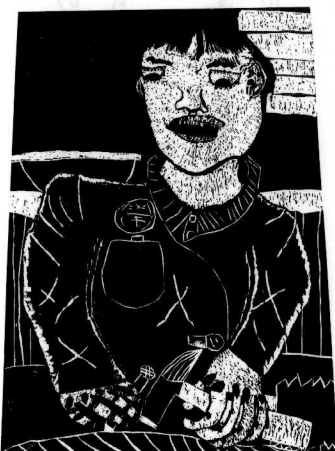
楯築の丘より見ゆる吉備中山卑弥呼のころ
は美し国ぞや

古へに鬼といはれし民ありて鬼ノ城築くか
吉備国の謎

鬼ノ城ゆ遠目にみゆる瀬戸の海 造山・作
山眼下にあり

箭田・牟佐と かうもり塚の古墳は葛藤隠
す常磐の石室

古代吉備 米・鉄・塩を多に生み大国なり
と経巡り想ふ



江見小5年 田中 悠紀夫

四ツ塚

江見和巳

清掃に数多の同志奉仕せりゆかりの志士の
奥都城おくつぎの山

播磨なる松山城を訪ね行き古き石碑感いしづまま
た新あらた

鬼の城のたぐひもあらぬ石組に昔の人の力
をぞ知る

城主の妻の墓とも傳はれるお袖塚をば我は
見出す

難解の数多の古書と取組みてあしたゆうべ
をはげみつつあり

櫟若葉の下に

中川 富美枝

鈴虫の音色が闇にひびきをり古い三人の家
の静もり

特記する出来事なきを佳しとして今日のひ
と日が急ぐかに過ぐ

急ぎてもゆるりとゐても巡り来る朝といふ
刻よわが生ありて

山の上の夏雲つかむ術もなしこの手を伸べ
ても届かざるもの

ひるがへる櫟若葉のその下に凡凡としてわ
が生活たつきあり

阿部仲麻呂

黒 藪 貴

持ち主は街に住み居てわが山の所在も知ら
ず荒るるに任せ

イスラエルパレスチナとの争いはあちら立
てればこちらが立たず

播磨との縁組多きわが里は播州訛りの抜け
ぬ人あり

三笠山の月を恋せし仲麻呂は帰国適はず唐
に眠らる

苦苦し興味のなきサッカーに騒ぎ過ぎしは
愚の骨頂

竹群のめぐり

黒 石 貞 子

竹群は泣くか怒るかひゆうひゆうと身をよ
ぢりつつ春を待ちをり

竹群に強風吹きて長き竹空を掃くがに大き
く揺るる

竹藪のこの煌めきを何と言ふ微塵の木漏れ
日ちらちら眩し

ゆく五月くるくる廻り竹の葉は誘はるる如
く舞ひて散り行く

朝まだきを静寂やぶりて雪折の竹弾けをり
鋭き音に

町の昨今

山下照夫

人老いて休耕田の多くして草木の生えいと
悲しけれ

町民の夢を載せたるインターは重機唸りて
山川動かす

難産の葬斎場は遂に出来されど早速行きた
くは無し

おらが町バレンタインホテルの繁盛し結婚
式に嬉しい悲鳴

好むとて好まざるとてやつて来ぬ國が主導
の合併話

夢よ醒むるな

杉本幸子(土居)

眠らねば会うこと出来ぬ亡き夫が逢いに来
し夜は夢よ醒むるな

花吹雪両手に受けて満面の笑を浮べし孫の
愛しき

亡き夫が大事に育てし石楠花の花よ今年は
何故に咲かぬか

盆くればみんな来るとの電話あり後何日か
とカレンダー見る日日

ふり向けば雪降る朝も雨の日も新聞配りて
二十三年

折折に

新免初子

作業終へ帰り来たれる耕運機草の匂ひをは
つかに立てをり

土割りてそつとのぞきし四葉胡瓜芽にはは
つかに露のきらめく

春一番の風と吾とは競ひあひ頭の上の帽子
おだやかならず

玻璃戸にて白き腹見する雨蛙無事にねむれ
と明りを消しやる

台風去り空ゆ光のあふれきて万の稲穂がお
だしくゆるる



土居小3年 河原亜季子

わが庭は花一面

森本久子

秋風を待つや水蓮ひらひらと夕立ありて水
玉走る

日影れば忽ち梅雨烈しくも見わたす青田雨
風走る

朝日受け柿の葉照りて露光る蛙とびゆき雨
を呼ぶなり

わが庭は花一面に咲きみちて香にたちくれ
ば頬を撫でする

山野草岸辺に見えて卯の花を照らす朝日に
雨ほしきかな

植物の生命力

春名房代

向日葵を蒔きて見事に生育し天突く如く開
花待ち居り

廃屋に季節忘れず紫陽花がつつましく咲き
いと可憐なり

昨今は秋の取り入れ早ばやと稲株芽吹き田
植せし如し

孫達の幼日のアルバムなつかしく今は成人
吾れも老いたり

亡き夫の十三回忌にぎやかなるを好みし故
人さぞ御満悦と

終戦初年兵の詩

小林亨

馬の餌盗み喰いて第一期検閲凌ぎし初年兵
らは

剣の鞘竹となり果て新兵は悲しきまでに心
萎びぬ

日日並びてモグラの如く穴掘れば心盲ひぬ
水際陣地に

グラマンの敵兵たしか笑いたり左足の肉を
挽ぎて飛翔さる

哀れなり天に特攻地に飢餓兵焼土と化して
國破れたり

中国を訪ねて

加藤保子

満洲へ行ける日待ちし亡き夫の写真と共に
中国へ発つ

道路ぞひに散髪する人さるる人中国北京の
三月の昼

はるばると来て長城を歩みたり数多異国の
人に混りて

始皇帝を守護をなすさまに並み立てる兵馬
俑とぞ等身大にて

空海の修業をなせしあとどころ記念碑の立
ちて人影少なし

孫

山下光子

嬰兒みどりこのまばたきもせず目を凝こらす吾見入る
かと祖母ばば馬鹿の境

足持ち上げ横向きなりし嬰兒はふと腹這い
て顔染め力む

這い這いをしかけし孫は手触るるを口に嘗
めては投げ散らかしぬ

衝立ての隙き間にのぞき隣席にアアア声
かく食處での孫

内孫を見も得ず早々逝きし亡夫否早や既に
見守り給うか

鉦の里に

山平順三

縁あつて鉦かねの里に神戸から田舎暮らしを樂
しみにくる

震災の廢材使い家建てて家族五人でカリオ
の谷へ

朝三時一番鶏が羽音たて今日も元氣に長い
なき声

畑中やさいは見えず草だらけ金肥使わず自
然農業

わが息子たった一人の新入生学校あげて大
歓迎だ

地球にやさしい生活

山平利恵

山羊産まれ家族も増えてにぎやかに鶏遊ぶ
のどかな我家

家の外鶏嬉しい放し飼いの卵もおいしい自然
養鶏

山は緑空気もおいしい作東の田舎暮らしを
楽しんでいる

温暖化車を辞めて自転車で峠を越えて駅ま
で走る

四十年もそれより前のスタイルで地球にや
さしい生活めざす



之 寛 名 春 吉野小6年

地子育ち

岡田利子

老いてなほちゃんつけ呼ばるる地子育ち若
き等と組みゲートボールに励む

豆畑のほとりに生ふるおいらん草活きづく
夕を妖艶に咲く

名月を拝みておもむろに里芋の皮むきはじ
む気楽なるひとり居

雨の日の路面にうつる我が影の淡きを追ひ
て出湯への坂

杖つきて行く出湯の坂道かはらねど雪散る
小宵はいと遠きかな

もう会へぬかも

北村和子

新聞は昨日と同じに四時に来て二千二年の
元日の朝

こだはりは捨ててしまへよ臘梅は凜と咲き
をり寒風の中

足をする蠅に蠅打ち持つ我は息をころして
呼吸を計る

また会へるもう会へぬかも草を焼く煙のし
みて言葉にならぬ

うすれゆく記憶をさぐるもどかしさ水仙の
葉はぐんぐんのびて

心

鳥形節子

花の咲く花水木の蔭にわが居れば山鳥来た
りてやすらふごとし

病みこもる部屋に届かぬ初夏の風障子開く
れば友に逢ひたし

右の足不自由なれども左の足ささへくるる
喜びありけり

病室の窓にやうやくよりそへば古里が見ゆ
つもの思ひぞ

咲きほこる花の姿に心をひかれ今日も笑顔
で明るく生きる

蛍

宿野和穂

裏木戸に止まりし蛍真夏日の暑さ凌ぐかじ
つと休める

夕暮れて覚めしか蛍あちこちと小溝の上を
光りつつ飛ぶ

溝べりの厨の窓に止まりしは夕べの灯り慕
ひし蛍

年毎に汚るる水に絶えもせで今年も生れて
蛍は飛びぬ

蛍見を約束せし人今は亡く水面に映る光悲
しも

春

名部方子

わが思ひ

鈴木秀子

雪解けて流れ清しき用瀬にひひな流して折
りし媪よ

豆の葉をむしる此の手が冷ゆるとき露桑摘
みしふる里偲ばる

一の孫の縁談進みて障子張る背に暖かき春
の日差よ

友と飲むコーヒーカップの真白さに野の色
に染む此の手が洪る

群雀寄り来りては稲素扱く見張の案山子歯
ざしりするがに

久々に帰省せる孫は背も長けて筋肉つきて
遅しかりけり

山里に愛づる人なく咲く菊の朝露光る涙の
如くに

離れ住む嫁と厨に立つことの幾度あらむや
わが残日に

豆扱ぎて秋の取入れ終りたる午後の日溜り
に雪虫の舞ふ

幾とせを夫と過ごせる時ありや二人三脚た
のしく生きたし

閃くままに

藤本伸子

北向不動の九十九折り坂登りきて神霊さそ
ふ岩清水かな

雨の音枕にしみるこんな朝起きたくないと
心がつぶやく

桂林の墨絵の世界を下る船にまぼろしの父
警備に立てり

復興の光の祭典ルミナリエ七年経りたる神
戸の町よ

秋の夜に立待月をながめては式部の心に近
づきゆくわれ



江見小4年 高田宏樹

春めきぬ

横山 美恵子

目に沁むる汗と涙を拭ひつつただ黙々と草
を引きをり

夫逝きて久々に聞く演歌なり好みてをりし
よ画像のうるみ来

チヨキチヨキと松剪る音はさはやかに庭師
は励む夫あらずして

たんぽぽにすみれ連翹紅きほけ白木蓮よ春
は満ち来る

春めきて草木はなべて芽吹きつつ生き返れ
ども夫は還らず

折折の花

光井 つや子

朝夕をこたつに憩ふ我なれど庭の木の間に
福寿草を見る

いざ行かな桜の元へ待ちわびし花の開けば
心開きて

春ふかく日毎ふくらむ白牡丹めでくれたり
し人の墓前に

雨後の庭に赤き花咲くきりしまよ朝の目ざ
めのよき友となる

野良仕事終へし帰りの山裾の不如帰の声聞
に消えゆく

折折に

横山 昌子

土手の道しだいに葛の蔓延びて道狭まりぬ
露にぬれつつ

朝ぼらけ後山三座に掛る雲刻刻晴れて山は
浮き立つ

黒豆を植ゑ居る山畑赤く染め目線の下に夕
日が沈む

背中より汗が生まるる感触に追はるる如く
草刈機使ふ

若くして逝きにし友の墓参にと訪ねし是里
よ霧の上なる

初夏の夕暮

安西 苑

一面に早苗植ゑたる広き田を茜に染めて夕
陽は沈む

朝も鳴き夕も鳴きゐる時鳥声をかざりに初
夏を告ぐるか

梅雨晴れて澄みたる空の夕焼けが木木の緑
を朱に染め上げたり

見上ぐれば月なき空に満天の星座は青く白
く輝く

慈しみ育てて呉れたる父母に背きて行きし
か少年囚は

庭の表情

横山 すみ子

清明の一雨過ぎて山茱萸の花は褪せゆく春
愁の庭

一雨毎に褪せゆく山茱萸のかたはらに花蘇
芳の花は今真つさかり

紅椿花の一つがぼろり落つ親子の絆の切れ
たるごとく

緋扇の実は弾けたり黒光りしてめなうの玉
をちりばむるがに

秋風にいろは楓の紅き葉が吹きだまりする
夕暮の庭

少女

名部 和子

新緑の下のベンチに少女ゐてハイネの詩集
のページを開く

駅前には花水木咲き新しき制服着たる少女ら
は行く

別れ来し人を思ひて夜道ゆく愛の詩をば口
ずさみつつ

帰らない子猫待ちゐる女の子ながき春の日
くれてゆくなり

リラの花咲けば北国思はるる神のしもべと
なりし乙女ゐて

金の貝

船曳 彩

ローレライ三番までを歌ひ終へ深く息吸ふ
百歳の母は

母の髪を切らねばと思ふ梅雨晴間チカチカ
光るパールグレレイに

目を細め蜆汁の実一つづつまみゐし母も
今は惚けたり

久々に鏡を持ちし母百歳しわの深さにしば
し声無く

百歳を迎へし母は夢うつつ潮干狩りにて金
の貝見しとぞ



吉野小1年 小林 ほのか

この道

長澤和枝

街へ去る子を送りつつ又も言ふすみれ咲く
道覚えておけと

道の辺のお地藏さまは白らが合掌されあて
頬笑み在す

総出にて出征兵士を送りしに還らざりしよ
村のこの道

父母と夫ねむれる墓への草道につるほの仄
かな紫が咲く

うす紅の夕焼空は億万の彼方ふと想ひみる
「銀河鉄道」

柚子の実

名部みどり

初なりの柚子の実日毎ふくらむをまはり道
して今朝もみてをり

まろやかなるまなこに小さく口とちて保安
帽の乙女に国道あかるし

山の中の校門前の家訪へば学童の喚声に足
もはづみく

回天に少年兵征きし白き道波よせ来りて声
かきこゆる

光うせし老婆の慰問文にペンとりて押花も
送りし十二歳の思ひ出

風

末宗千歳

女郎蜘蛛風の吹くままゆるるまま虫を待ち
ゐる孤独なる様

台風の進路報ずるラジオ聞き涼風背に受け
草取り進む

夜のしじま蛙の声のつと止みて生しき風の
吹き来る気配

穂孕みの田の面を渡るそよ風は雀おどしを
きららにゆらす

みどりの風稲穂のじうたんゆらしゆく田の
面にあかね飛び交ふ真昼

徒然なるままに

加百由起子

あたたかき焼芋の香りたゆたへり雪のちら
つく場末の町に

斯くまでも理不尽我に襲ひ来や押へし怒り
ふつふつ湧くも

水見する我の頭上を陽気なる揚ひばり鳴く
朝の早苗田

曇天に花水木の白のみ冴え冴へと幾千の蝶
たゆたふごとく

朝光にまとへる露をかがよはせ蜜袋はうつ
向きて咲く

折々に

森本 かよ子

山ひだを霧おもむろに立ちのぼる神の山な
らむ作州の山

作北の国道の辺の黄なる花菊ヶ峠を風と越
えしか

二羽の蝶もつれもつれて舞ひをりぬ菜の花
畠に春日は永く

翁草の種をとらむと手にとればほの温かな
り綿毛ふんはり

万葉人の生き生きみたる明日香村この山川
も風のそよぎも

柿本人麻呂と依羅娘子

谷名 保美

眼交に佇ちくる人麻呂清清し刑の在り処や
沈める鴨島

人麻呂の依羅娘子恋ふる歌石見の海の静も
りにあり

石見の海夢と現の迫間にゐて依羅娘子の恋
歌になく

世世を経て人麻呂恋ふる妹の歌せつなくか
なしもまばゆく羨し

人麻呂と依羅娘子の魂は石見の海の光とな
らむか

悔悟の海

関内 惇

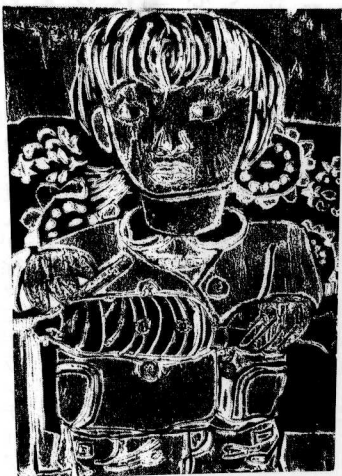
空のあはひ海のあはひのおぼろかに果なく
広し三井楽の空

漕ぎてゆく荒雄が沖に袖振るをわが目に視
むと眼を閉づる

飯盛りて荒雄を待ちしひと飯盛りて征きに
し兄を待ち待ちし母

沖つ鳥嶋とふ船の見えなくに我は立ち見る
両手を広げて

沖に向ふ舟は小さく水尾を引きゆるると
ゆく悔悟を乗せて



粟井小3年 芦田真穂

文化協会芸能部の活動について

松本 壽豊

書画写真は『ふるさとまつり』に展示されるが、「芸能部」の活動は兎角皆々様の目に止まらない存在となっておるのではないかと思います。町内各地に於いて、色々の芸能グループが情操的教養の履修を深める目的にて流派別に町内での発表の場を持たずに研鑽に励んで居りました。

平成二年詩吟を研修するグループで、流派を離れ「多胡 正」「衣簾義文」「香山勇作」「名部竹夫」「名部尚司」その他有志各氏により「主催 作東町文化協会芸能部」「担当 吟剣詩舞道各地区役員」により『作東町吟剣詩舞発表会』が開催され、平成十二年筆頭世話人であった『多胡 正』様が病気で倒れ永眠されるまでは百人を越す、吟詠、詩舞、剣舞、の出演者で毎年盛会を極めました。

平成十年「日本舞踊、詩舞、剣舞、錢太鼓」等のグループより、芸能部での合同発表会開催をとの要望があり、会を重ねた協議の結果、平成十一年三月「第一回舞の会」をバレンタインパークの舞台で開催、現在第四回まで継

続、第四回には吟詠の一部も合同で開催しました。更に勝英二郡の文化協会による、『よしもと湯郷公演』前座出演にも平成十三年より参加、昨年と今年二回三十分、四十分を出演して居ります。

今年には作東町「敬老会」にも慰安芸能を出演しました。縁の下の活動かも知れませんが徐々にボランティア出演の発表を広げて行ければと考えて居ります。学校等々週五日制の時代、人々の心を穏やかにし、心が安らぐ芸事は生涯教育ばかりでなく、これからの時代にストレスの解消と「忙中閑を求む」の心境になっては如何でしょうか？

芸事は礼儀を重んずるので、殺伐とした社会の中に忘れられた人の本当の優しい心を取り戻す機会になると思えます。不器用で何も出来ないと言わず、何か一つに飛び込んで実行されん事を切望し祈念して稿を終わります。

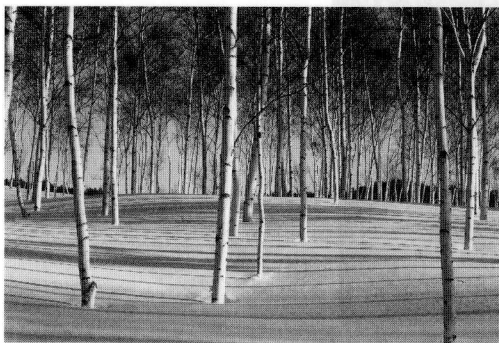


写真 安田 隆

支部活動報告

土居支部長 根岸 勘男

今年の夏は、今迄の夏より暑い気がしてならない。年のせいだろうかとも思うが、一方日本の上空には強い太平洋高気圧が居座っているとのお陰で二つか三つかの台風さえ上陸せずすんだとか。しかし私達ブドウ作りも今年はあまりの暑さで困りました。いつもであれば山上（えんじょう）の夜は涼しいのですが、今年は夜温が下がらない、むせて、むせて、出荷日程が近づくのに酸味がなかなか抜けない、糖度は充分にあるのに甘さを感じない。それで普及所にたずねると、それは水分補給をやりなさいと言われ二・三日おきに水分を補給するとすぐに酸味が抜けておいしいブドウになった。今迄は、色つきが始まると水分を控えて干して糖度が

増すのを待ったが、今年は逆である。これも一つの経験である。今の政治も逆であるが私達にいい事があるだろうか。多くの識者は消費を高めて物の生産が進み流通が出来て借金返済出来ると言っている。私もそう思う。国民の大多数もそう思っているのではないだろうか。しかし政府はそうはしない。銀行救済と大企業奉仕の政治だけである。中小企業にコスト削減を押しつけ首切りを奨励し中小信金には金を廻さない。農民には減反を押しつけ米の輸入は促

進する。ついには国民の老齢化が進むと言う事で医療費の個人負担増を数の力で反対を押し切り介護保険料は来年から更に上がるとか。これも太平洋高気圧の居座りが原因だろうか？ 本当に困ったものである。高いところと低いところの調整を取るのが政治だと思っていたのですが、低いところから取り上げる事だけを考えているようである。暑さで私も頭がおかしいのかも知れませんが文化誌に土居支部の計画等を書くように言われ書きかけたが原稿用紙に一枚もないので私のぐちを書かせてもらった次第です。

幸い今年には二年に一度の研修旅行を計画して居ます。日時は平成十四年十月六日・午前七時三十分発・集合場所 土居農協広場（駐車は依頼済み）行き先は 琵琶湖博物館・大原三千院（二本殿ご開扉）等です。

それからもう一つ、これは土居地区愛と長寿の町づくりを進める会による土居地区文化祭ですが十一月九日、午前十時より土居小学校屋体に於いて開催する事になりました。去る六月十七日第一回文化祭実行委員会を開き、前回と同じように私が責任者として行う事になりました。現在は月に一回程度演芸の部、展示の部でグループ探し、掘り出しを行っています。今年には昼食も皆で食べて子供たちにも参加を促し地区民総参加の文化祭になるようがんばりたいと思います。

作東町文化協会会則

(名称)

第一条 本会は作東町文化協会と称する。

(目的)

第二条 本会は作東町住民の文化生活の向上を期すると共に、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事務所)

第三条 本会の事務所は作東町教育委員会事務局内におく。

(事業)

第四条 本会は第二条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 一、講演会・研究会・展覧会等の開催。
- 二、文化誌などの発行。
- 三、その他文化の推進に関する事業。

(会員)

第五条 第二条の趣旨に賛同し本会の事業を推進する者を会員とする。

(組織)

第六条 本会に部及び支部をつくることができる。

(役員)

第七条 本会に次の役員をおく。

会長 一名、副会長 二名、理事、部長、副部長、支部長、評議員 若干名、監事二名

(役員の仕事)

第八条 一 会長は会を代表し会務を総括する。

二 副会長は会長を補佐し会長に支障があった場合は会務を代行する。

三 理事は会務をつかさどる。

四 部長は部を総括し副部長は部長を補佐する。

五 支部長は会務をつかさどり支部の振興を図る。

六 評議員は運営について協議する。

七 監事は会計を監査する。

(役員を選出)

第九条 会長・副会長は理事会で選出し総会で承認を受ける。

二 監事は総会において選出する。

三 理事は部長・副部長・支部長をもってあてる。

四 部長・副部長は部で、支部長は支部において選任する。

五 評議員は部長・支部長が推薦し理事会において承認を受ける。

六 任期中途の補充役員は理事会において選任することができる。

(事務局担当者)

第十条 事務局担当者は会長が委嘱する。

(役員の仕事)

第十一条 役員の仕事は二年とする。但し再選を妨げない。

二 任期中途の補充役員の仕事は前任者の残任期間とする。

(顧問・特別顧問及び参与)

第十二条 本会に顧問・特別顧問及び参与をおくことができる。顧問・特別顧問及び参与は総会の同意を得て会長が委嘱する。

(会議)

第十三条 総会は毎年一回開催する。但し必要に応じて会長は理事会の承認を得て臨時総会を開催することができる。

二 評議員会を以て総会に代えることができる。

三 理事会は年四回開催する。但し必要に応じて臨時理事会を開催することができる。

(経費)

第十四条 本会の経費は会費・賛助金・町よりの事業委託料・その他をもってあてる。

(会計年度)

第十五条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり三月三十一日をもって終わる。

(会則の改正)

第十六条 この会則は、総会の議決により改正をすることができる。

(附則)

一 会員は年額一口千円の会費を納入するものとする。

二 部会は書道・絵画・園芸・茶華道・文芸・歴史・写真・陶芸・芸能・棋道・情報映像・手芸とする。

三 この会則は昭和六十三年四月一日より施行する。

四 平成十年三月二十九日会則一部改正 平成十年四月一日より施行する。

五 平成十一年三月二十一日会則一部改正 平成十一年四月一日より施行する。

六 平成十四年三月二十四日会則一部改正 平成十四年四月一日より施行する。

平成13年度 作東町文化協会事業報告

【全体事業】

年	月	日	事業名	内容
13	4	23	第1回理事会	13年度事業計画・会員募集について
	5	7	専門部役員会	専門部行事計画・予算配分について
	5	7	第1回編集委員会	編集委員長選任・編集方針について
	5	29	勝英2郡文化協会総会	英田町公民館/12年度決算、行事計画
	6	6	第2回理事会	研修旅行・原稿募集・文化展について
	8	7	第2回編集委員会	以降3回開催
	8	26	研修旅行	法隆寺、薬師寺
	10	20	文化誌27発刊	会員全体に配付
	10	23	勝英2郡文化協会研修会	英田町公民館ホール/講演会
	10	26	役員会	文化を語る会について
	10	26	文化展準備	会場設営・作品搬入
	10	27	文化展	海洋センター/27日～28日まで
	11	5	作東の文化を語る会	町長を囲んで文化を語る
14	1	25	第3回理事会	春の書画写真展について
	3	5	第4回理事会	総会について
	3	23	春の書画写真展	改善センター/24日まで
	3	24	文化講演会・総会	バレンタインプラザ

【各専門部・支部活動】

年	月	日	部名	内容
13	4	15	棋道部	囲碁大会(4, 8, 1月)開催
	4	28	吉野支部	文化展 きんちやい館/5月6日まで
	4	28	園芸部	春の山野草展 きんちやい館/5月6日まで
	5	3	絵画部	春の絵画展 バレンタインプラザ/5月6日まで
	9	22	白雲書道展	白雲書道展 バレンタインプラザ/9月24日まで
	8	13	福山支部	文化展 地区センター/14日まで
	8		茶華道部	サマーバレンタインにて茶席
	8		園芸部	籠・鉢作り・寄せ植え きんちやい館/不定期
	8		陶工芸部	陶芸教室
	10	7	茶華道部	尺八の会と茶会
	10	7	茶華道部	近代生け花展/バレンタインプラザ
	11	15	吉野支部	研修旅行 島根県 伝統工芸展・県立美術館
14	2	16	絵画部	日本画
	3	10	栗井支部	第12回栗井文化祭
	3	31	芸能部	第4回舞の会
			歴史部	町内歴史散歩 毎月第3水曜日
			歴史部	古文書を読む会 毎月第3金曜日 午後1:30～
			文芸部	川柳同好会 奇数月最終水曜日例会
			絵画部	日本画教室/江見地区センター 第2土曜午後1:30～
			絵画部	絵画教室/環境改善センター 第1・3土曜日午後1:30～
			棋道部	囲碁会/エミー 毎水・土・日曜日 午後1時～
			茶華道部	役場窓口・公民館への展示
			陶工芸部	中央公民館 毎週月曜、毎月第2・第4水曜日9:00～12:00
			情報映像部	作東町文化協会HPの作成、開設
			愛寿大学趣味の講座	書道・生け花・短歌・歴史・手芸

作 東 の 文 化

第28号

平成14年10月15日発行

.....

編 集 作東町文化協会文化誌編集委員会
岡山県英田郡作東町教育委員会内

編集委員 谷口重人 安東琢之 安東靖雄
上山克巳 小坂田貢 香山勇作
原 洋一 三木忠司 光井和彦
横山 猛

発 行 所 作東町文化協会
岡山県英田郡作東町教育委員会内
☎ (0868) 75-1111 〒709-4292

印 刷 所 株式会社 廣陽本社
岡山県津山市田町22

あ と が き

小学生の版画が、さし絵として何年かぶりに復活した。誌面にうるおいを持たせる効果を期待して。

本誌が会員全員配布を実施して10年になる。会員名簿を掲載することで領収書の役割をはたしているとも言える。しかしこのことは逆に会員以外の方にこの冊子が眼に触れる機会を奪うことになってはいないか、との反省もある。秋の文化展会場で実費販売を行っているが、会員の方が自分の友人や知人への送呈用として購入されているのが大部分のようだ。町内はもとより町外を含めて関心を持つ人々に読まれることによってさらに充実した誌面を模索する方法を考えねばならないと思う。

ともあれ、本号も多くの投稿を得て、さしたる苦労も経ずして編集を終えた。諸氏の協力に改めて感謝申し上げると共にさらに来月号へ向けての研鑽を期待したい。

又お金の話で恐縮だが、本誌の製作費は65万円、1冊約600円を要するわけだが、文化協会の年間予算の約4分の1を占めている。会員へは全員無料配布だから1000円の会費のうち6割をお返ししているといえなくもないが、それだけに内容をより充実させるためにも、より多くの会員の参加によって文化協会文芸愛好者の唯一の発表の場としての使命をはたさねばならないと思う。

文化誌編集委員会